

品川の電球工業 - クリスマスツリー用電球製造 -

電灯のはじまり

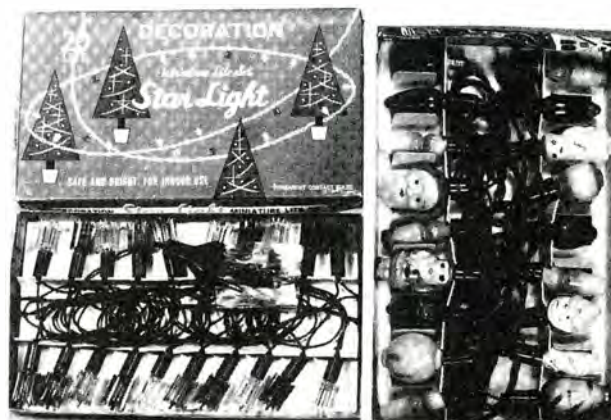
江戸時代、庶民の家の明かりは行灯で室内は暗かったのですが、安政の開港後、外国から石油ランプが輸入され、珍しいのと明るいのとでもたたく間に広がっていきました。品川の一般家庭でも明治5・6年ころには使いだしたといわれています。また品川宿などの町場ではガスを灯火として明かりに利用しました。(大井町駅前広場にはガス灯があり、ガスが燃料として使われるようになるのは明治42年ころからです。)

日本ではじめて電灯の点灯に成功したのは明治11年(1878)のことで、電池を使用したアーク灯(電気灯と呼んだ)でした。明治16年には、東京電灯会社が設立され、白熱灯の実用化がはかられ、次々に電灯会社ができました。品川にも品川電灯会社が明治23年(1890)に設立されたのですが、一般に電気が普及するのは、明治40年ころからでした。ですから、品川町の商店では大正時代になってもガスと電灯の二つの明かりをそなえた家々が多かったのです。

電球の国産化と豆電球の製造

日本ではじめて電球を製造したのは、京橋の白熱舎で明治23年のことです。明治27年の日清戦争以降、急激に電気事業が発展し、電球の需要が増加していきました。白熱舎も発展的に会社名を変え、明治32年には東京電気株式会社となり、35年には北品川に電球のガラス球を製造する研究工場を設立しました。明治44年には、大井町(現在の阪急百貨店付近)に大井工場を設立し、タングステン電球の製造を開始しました。大正にはいると工場の規模も拡大し、小型電球の生産にはいり、電球工業の拠点になったのです。

一般家庭用電球はマツダランプ=東京電気が



品川区で生産された輸出クリスマスツリー用電球(昭和30年頃)

独占的でしたが、小型電球とくに豆電球は生産設備が小規模でできるため、明治末から大正にかけて、豆電球製造業者が品川・大井・大崎や隣の芝区(現在、港区)に続々と誕生しました。

豆電球は第一次世界大戦(1914~1918)以後、欧米諸国に懐中電灯用として大量に輸出されました。クリスマスツリー用電球も「ラッキョウ」とよばれ、アメリカ向けに輸出され、特に果物、花、人形などを形どった、変形電球(ファンシーランプ)の輸出のはじまりでした。

品川の輸出クリスマスツリー用電球

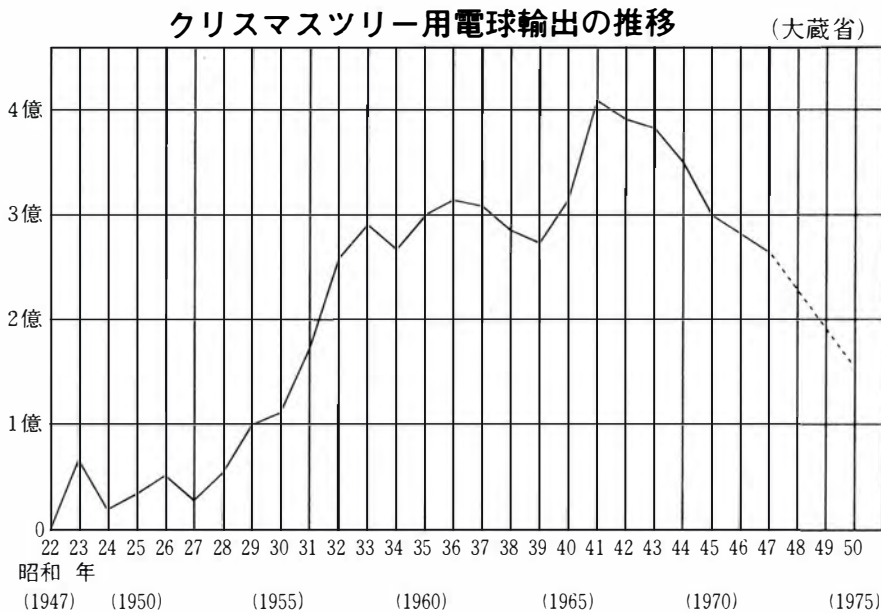
アメリカ向けを主とする輸出クリスマスツリー用電球工業は、零細な家内工業に負うところが大きく、手工業的な技術と低賃金に支えられ戦前から品川区の代表的な地場産業として発展してきました。

太平洋戦争で工場や機械を失ったところもありましたが、戦後の復興は早く、昭和21年(1946)には、クリスマスツリー用電球の輸出が始まりました。翌年には、実に400万個の輸出が行われたのです。

その後は、電球製造業者の増加に伴い、生産量も順調に伸びていったのですが、多数の零細業者の乱立と問屋中心の生産の仕組みがわざわざ、いたずらに数量を多くすることに走り、

低価格競争を招いてしまいました。そのため、業界は昭和33年に日本輸出クリスマス電球工業組合を結成して、自主的に生産調整を行い、価格の安定をはかりました。

クリスマスツリー用電球輸出の推移(下表)を



見ると、戦後に輸出が再会されて、昭和35年には3億個、昭和41年には4億個をこして最高を記録しています。46年以降は年々減少していったのがわかります。この中で、品川区内の工場での生産量の占める割合は、80%で日本一の生産量を誇っていました。

クリスマスツリー用電球工業の転機

わが国の産業・経済は、昭和30年代のはじまりとともに戦後復興と訣別し、神武景気、岩戸景気と騒がれたころから飛躍的に発展していった。高度成長によって、大都市での労働力の不足や労働賃金の上昇は電球工業界にとって、大きな問題となっていました。低賃金と家内労働を基盤とした零細工場では、大企業との賃金格差が大きく、さらに、台湾・韓国・香港などの国々との価格競争に勝てず、輸出は下降線をたどっていきました。なかには設備を近代化して

生産性を高めたり、豊富な労働力を求めて工場を移転させて競争力を高めようとしてきました。昭和39年には秋田市郊外に新しい設備の工場を建設し、18工場が移転したのですが、必ずしも順調ではありませんでした。工場の地方移転は、

秋田県のほか、茨城県、新潟県、五日市町(多摩地区)等で、区内全工場数約360工場のわずか6~7%にすぎなかったのです。品川区内には昭和40年(1965)でも162組合加盟工場があり、零細工場としての体質の改善は遅々として進みませんでした。しかも、発展途上国の台頭によって価格競争でますます苦境に追い込まれ、昭和46年には品川区で40工場に激減していきました。

クリスマスツリー用電球から他品種へ転換

かつては日本一を誇ったクリスマスツリー用電球の生産は、衰退の一途でしたが、多品種の電球生産に力を注いできたところもありました。新製品として特殊電球の開発です。主なものをあげると、インテリア照明用、自動車、鉄道、航空機、光学関係等をはじめ、先端技術の進歩にともない、超小型の電球を考案して実用化してきたのです。クリスマスツリー用電球の生産は、大幅に減少していますが、豆電球を逆に台湾などから輸入してセットにまとめ、製品を輸出しています。

現在の品川区の電球工業は、家庭用標準電球と特殊電球を安定して生産しながら、新製品の研究にも力を注ぎ、技術を生かした産業へ変わってきました。